僕らの日常ＳＯＳ！！

ものもらい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕らの日常ＳＯＳ！！

【Ｎコード】

Ｎ３５７８Ｇ

【作者名】

ものもらい

【あらすじ】

王国騎士団第二隊の、のんびりした毎日ばっかり。

見た目はクールビューティーで中身はツンデレで時々格好良い隊長さんと、笑顔が輝かしいトラブルメーカー副隊長ちゃんが適当にふざけてたりじゃれ合ってたりする微笑ましい（？）お話。

1．隊長殿の悩み事

あいつ、リーン・ロッテはすっごい…変な奴だ。

同じ騎士連中にそう言うと、大抵が「女で騎士をやってるって時点でちょっと変わり種だろー」とか、「変ってお前、あんな別嬪さんが部下って時点で羨ましいのに何言ってんだコラ我儘言ってんじゃねーよ」とか言うが、そういうのじゃなくてマジで変な奴だ。あと最後の奴コレ我儘とかじゃねーからな。

まぁ最後の発言の通り、確かにあいつ、リーン・ロッテは外見は良い。隊服を改造しまくってるがまぁ…その辺は皆から黙認されてる。

肩を少し超すぐらいの金糸に紅茶色の瞳、営業スマイルとかを見ると、ああ良いとこのお嬢様ってやっぱりこうだよな、ってお嬢様の優雅さを感じる。

が、そんな整った容姿もプラマイゼロどころかマイナスになるぐらい、あいつの本性はとんでもない変態だ！

人に女物の格好させようとしたり、それを写真に撮って売ったり、よく分からん事言ったり。俺男なのに「愛い奴め」とか、この前なんか「見目麗しい兄弟のＣＰが見たい」とか言って兄貴が苦笑いしてるのをいいことに……ああ思い出したくもない！

何であんな変な奴が俺の部下なんだ。何であんな奴に補佐されなきゃいけないんだ。

隊長職辞めようかな……。

★

私の上司、クース・ウェスポンたいちょーは、ツンデレです。

友達でお姫様のルシェにそう言ったら「あーそういえばそうねー」って同意してくれたし、あの人が初な反応するからそれを写真に収めて女中の人とかに売ると良い値で売れるんだよね。顔良いし。

女の子みたいに目がぱっちりしてるし。林檎と蜂蜜色のオッドアイに黒髪。しかもすっごい髪サラサラ。ギャルゲーみたいだし↑

たいちょーは弄るな弄るな言うけど、あなたの髪が長くて良いにお…ごふん、何かこう弄りたくなっちゃうんですよ。ツインテとかしちゃいたくなるんですよ。

第一女装させようとしたぐらいで何で小一時間も正座で説教されなくちゃいけないんですか。普通こんな体験できないんだから貴重な体験として積極的に…したら流石にキモイな。

うーん、もうちょっとお手柔らかに（？）女装しましょうよ。

まぁたいちょーはツンデレですからね、コツを覚えればすぐデレっとしてくれるんで扱いやすいです。

何だかんだ言ってお願い聞いてくれるし。盾代わりに使っても半泣きで怒るぐらいだし。

そんな君が大好きさ！そのままのたいちょーでいて下さいね！

★

（ツンデレ女顔隊長さんと腐女子でちょっと変態くさい副隊長さん）

1．隊長殿の悩み事（後書き）

＊「僕らの日常ＳＯＳ！！」のイラスト、更新情報等、灯茄の日常生活が主のブログ↓「墓場のリュートと崩れた墓標」ｈｔｔｐ：／／ｋａｄｕ．ｂｌｏｇ．ｏｃｎ．ｎｅ．ｊｐ／ａｖｅ２９１０／コメント等をくれるとすっごい喜びます。

2．俺らの戦場はいつもこんなのです。（前書き）

今回はちょっとグロイお話です。
苦手な方はご遠慮ください。

2．俺らの戦場はいつもこんなのです。

王国騎士団第二隊のお仕事、それは警護とー討伐とーあと…お守、とかですかね。

まぁ三番目の「お守」で分かるように、長らく戦争のない我らが王国は、のんびりまったり平和を謳歌しています。

しっかーし、だったらお飾り騎士団はぶっちゃけいらないじゃーん？てな訳なく、

今、この国は魔物に手を焼いているのであります。

★

――――――――斬って斬って走ってコケて嗤われて（部下に）怒鳴りながら斬って、

もはや何回それを繰り返したかも分からない。まぁ疲れたし、律義にそんな事を数える性格じゃないが――――――――べしゃ、

「……うあぁ」

…雑念が思考を満たしていると、視界の隅に鶏頭の魔物が首を吹っ飛ばされ、気前よく血を噴き出しているのが見えた。

「…うぇっぷ、」

ころころ、こてん、よりにも寄って転がる頭はこっちを向きやがった。

未だにじわじわと血が溢れている頭に付いている、今や片目のみとなった目からも血がこぽりと出てくる。もう駄目だ。戻したい。二回目の嗚咽だ。

――――――――いつもこんな状態で仕事している俺。よく仲間内に何でこんな職に志願したんだと言われる。

いや、この歳でいうとアレだが、スプラッタな物は苦手なんだ。でも憧れてたんだよ、騎士に。

主君を護り、か弱い民を護り、華麗に剣を振るい礼節正しい騎士。

……でも現実はそんな物語の様な幻想の騎士なんていない。
今日だって優雅のゆの字も無く慌てて食事をとり、食べかすが付いていると笑われ、くたくたになって乱れた剣筋で何とか相手を倒す。

こんな俺の想像する騎士像に当てはまる人は、きっと世界で兄貴しかいないだろう。気まぐれな魔女の隣でいつも優しく微笑む兄。温和で礼節正しく実力も伴った、何をさせてもそつの無い人。
まさに幻想の騎士だ。ヘタレた部分を除けばなんとも古典的な――――ぅあああああ目が半回転したぞあの鳥頭……うえ、一気に昼飯が喉元まで来た。
ちょ、落ちつくんだ俺。落ちつ…うぇっぷ。

「――――――…ちょー」

片手に握ったカットラスを不用心にもだらりと下ろして、空いた片手を口にあててていた俺は、血痕を転々と付けて転がる頭に十字を切り、一瞬聞こえた声に振り向く。

振り向き、そしてびっくりして後ろに後ずさった。
だって振り向いたら涎垂らした熊さんが、のぼーんと両腕を天に向けて「いっただきまーす」なんてポーズされたら誰だってビックリだろう。

「あ、……ばばばばば！？」

状況は理解できたが言葉が出てこない。
俺は奇妙な叫び声をあげて振り下ろされた手を後ろに下がって避ける。
次いでゆっくり慎重にカットラスを構える。対する向こうはグルル、と得意そうに唸った。

「――――――い…ちー」

ああ、また声が。
その声に反応するのと退路が無いのに気付くのは同時だった。

「――――――〜〜っ！…く、くんならこいやぁ！」

踵にコツンと何かが当たったのを皮切りに、俺はカットラスを横に薙いで前に出る。

大地を力強く踏んで、剣を横に一閃しようと力んだ。
短く息をついて斬ると、熊さんは痛みで咆哮をあげる。第二撃に踏み込もうと構え直していると、熊さんの頭が吹っ飛ぶ。微妙にデジャブだ。

「……むぅ、たいちょーってば、何で私が何回も呼んでいるのに無視するんですか」

どさり、と熊さんが倒れる。
すると一人の少女が、黒い薔薇の透かし彫りの、品の良い意匠をさ

れた斧を片手に持っているのが、見えた。

――――彼女はリーン・ロッテ。

俺達第二隊の騎士で、下っ端期間もなしにいきなり副隊長に着いた奴だ。

重量を操る魔法だけが唯一使えて、お嬢様とは思えないほどに足癖が悪い。

そんな彼女の容姿は、肩を超すような長さの金髪で、瞳は綺麗な紅茶色。片目は何故か眼帯だ。聞くのも悪い気がするので理由は分からないが。

髪の一部を黒いリボンでまとめ、改造しまくった隊服を纏っている彼女は、人懐っこい笑みを浮かべている――――なんともこの場にはふさわしくない。

「聞こえなかったんだよ。つーかこっちは涎垂れた熊さんに襲われかけて…」

「獣姦されかかったみたいな言い方しないで下さい」

「じゅ…！？ちょ、女が何言ってんの！？」

「だってたいちょ―の言い方…厭らしいです…」

か弱い声で言うが、くすり、と嫌味がこもった笑顔では意味が無い。

「…あ、たいちょー、こんなところに血が」

「え、ってぇぇぇぇぇ！！」

ぺろり、と俺の頬を苺の様に赤く熟した色の舌が這う。じくり、と傷が痛み、心臓はせわしなく動いている。

おそらく耳まで赤いのだろうと思う。けれど上手く口が動かない。
さっきからずっとだ。

とりあえず落ち着こうと、息を深く吸う。疲れをも吸ってしまった気がする。今日は何回落ちつこうとしたのだろうか。

…さぁ落ちつけ俺。リーン・ロッテは何とも際どい事をするがそれは俺の反応が見たいが故だ。ここでちょっとでもあいつが望む反応をしたら続行決定だ。……べ、別にそれもいいかな、とか、一瞬たりとも思ってない。

リーン・ロッテは唇に人差し指を当ててちょっと考えた顔をする。

「…鉄の味だ…」
「その他に何の味があるんだよ！？つーか吸血鬼か、お前は！！」
「だってそんな蕩けた林檎と蜂蜜の目をしているから、……そんな味がするかなー…って」
「…お前…考えが突飛だよな。思考回路どうなってるんだ」

そして詩人か、と思うようなその台詞……いや、ナルシスト、か。なんとキザな台詞だろうか。睦言の様な……今ここに俺ら以外の人がいたら誤解されそうだ。

「ちょっと、変人みたいな風に言わないで下さい！失礼な」
「事実だろ」
「違いますぅー、そんな事言ったらたいちょーは『ぼんやりちゃん』

ですよ！後ろから鶏さんが来てるのに気付かないでぼんやりしてるだなんて。私が斬らなかったらどうなっていた事か…」
「あ、アレやったのお前か……ってじゃあ何で俺の近くに首がふっ飛ばされてんだよ！？あと『ぼんやりちゃん』じゃねぇ！」
「いちいちツッコミの細かい人ですね。そんなの決まってるじゃないですか。私が投げたからですよ」

そこで俺は想像してしまった。
身のこなしも容姿も『華麗』な少女が、真っ黒の斧で鶏の首を処刑人の様に飛ばす様を。斧は柔らかい首に食い込み、血が黒い斧に染み込み……。
血だまりに落ちてもなお血を噴き出すそれを片手で掴み、少女はにやりとぼんやりとしている俺へと放り投げる。そしてその首は……。

「悪魔め！」
「なんですその言い方。命の恩人ですよ、私？」

普通に助けろよ！と言おうとして、開けた口に何かを放り込まれる。
ピンク色の丸い物…だった気がする。
思わず固まった後、片手を口にあてて抗議する。目で。
だってなんかしゃべったら食っちゃいそう。

「あ、それ別に何かの肉とかじゃないですよ。ただの苺味の飴です」
「んだにょ、ひょれにゃらひょーいえにょ」
「……ぷふーｗｗ」
「……笑うな」

もごもごしながら抗議してみる。恥ずかしいので目はずっとリーン・ロッテの赤い靴を見続けた。

「私はレモン味にしましょうかね、」と言ってガサゴソと音を立てるのでやっと目を開ける。
オレンジ色の包装から黄色い飴を摘まんでひょい、と口の中に放り込む、美味しそうに目を細めているリーン・ロッテが落ちつくのを待ってから、気になる事を聞いてみた。

「おい、なんで飴持ってんだ？」
「ん…、B班が今ヤバイってさっき連絡係の人が…頑張れって飴貰いました。リフレッシュしないと」
「ああリフレッシュ……えええぇ！？」
「…？なんですぅー？」
「おま、B班って…！？」
「クロットが『僕もう無理だよパトラッシュ…』って言って」
「ちょ、そういうのは早く言え！」
「だから呼んだじゃないですか」

ぽふー、と口を尖らせるリーン・ロッテにチョップを喰らわした。

（これが僕らの、）

2．俺らの戦場はいつもこんなのです。（後書き）

＊「僕らの日常ＳＯＳ！！」のイラスト、更新情報等、灯茄の日常生活が主のブログ→「墓場のリュートと崩れた墓標」ｈｔｔｐ：／／ｋａｄｕ．ｂｌｏｇ．ｏｃｎ．ｎｅ．ｊｐ／ａｖｅ２９１０／

コメント等をくれるとすっごい喜びます。

3．意外と仲のいい二人（前書き）

ペン入れ完了！挿絵つきでっせ。

3．意外と仲のいい二人

――――――――遅い。

そこらの騎士を使いパシリにして一時間。問題児二人組の班が来ない。

★

僕の名前はクロット・カルデン。

優しげなどこかの貴公子風の容姿、並々ならぬ魔力、落ちついた物腰…といった、貴族として理想的な三つのポイントを持った僕は、城の女中から奥様方、若いお嬢様方にまで受けがいい。

しかし……これが理になった事なんて、そうそう無いのではないだろうかと、入隊してからずっと思ってた。

だって最初の容姿だなんて、第二隊の問題児二人――――扱いの難しい隊長、クースと、その隊長で遊ぶのが大好きな副隊長、リーン

ちゃん――――の起こす問題のせいで胃を痛めて、最近やつれてきた感があると言われた。（リーンちゃんに）何と言うか、幸薄そうな顔をしている、とも言われた。（クースに）

そしてこんな二人のせいで僕の容姿など薄れてしまう。
特に同性のクースなどは長い綺麗な黒髪、大きな赤と金のオッドアイ（「睫毛長―い」と言ってリーンちゃんが小突いてた）、驚くほど細身で（リーンちゃん曰くがっしりしてるが着痩せしてるだけと言っていた。え、見たのか？）陶器みたいに白い肌、そして持ち前の恥ずかしがり屋で不器用なところ（これまたリーンちゃん曰く「ツンデレ」というものらしい）を見せられたら…もう女性はノックアウトだ。

それなのに何故彼には浮いた話が無いのだろうか。さっさと誰かと付き合ってくれたらいいのに。フリーな身の上じゃなければ女性ファンも減る筈だ。
でもまぁ…そんな浮いた話、無いだろうなぁ…。かなりの奥手だし。

で、第二の「魔力」では、「第二隊一の魔法使い」だと自負してる……国一番には絶対なれないけど。

その昔、この国の三番目の姫、幼いながらも凄腕であった魔女、ルーシェット・S・カーレン姫が13歳の時、噂になりつつあった僕が（当時彼女の大嫌いな二の姫付きの騎士であったというのもあるが）生意気と思ったか邪魔と思ったか、お得意の猫被った笑みで手合わせを、と言われ、こっちはこっちで、名を上げられると思って了解した。（あと強請り方可愛かったし）

でも勿論相手は姫。怪我させない程度にしなければならない。
本来なら花を持たせて負けるべきなんだろうが、耳元でぼそりと「

ワザと負けたらお前を豚に変えて焼いて食べるから」と言われたら（そして彼女の噂を日々聞いていたら）本気を出すしかないと思うだろう。

で、頑張ってみた。最初は楽しげだった彼女だったが、段々飽きたらしく（期待するほどでもなかったと捨て台詞まで言われた）その時の記憶は彼女の高笑いしか覚えていない。気づいたら豚小屋の藁にまみれていて、クースの双子の兄で彼女の筆頭騎士、ロストさんが申し訳なさそうに迎えに来なければ一人で泣いている所だった。

そして最後の落ちついた物腰に関しては、自分の元の性格もあったんだろうが、あの問題児二人にはガミガミ叱っても無駄とよく分かったからである。最近は楽観主義になってきた気がする。

そして今もその楽観主義で呑気にA班を待ってみる。

……やっぱり来ない。

★

「風さん風さ――ん、暴風となってアレふっ飛ばしちゃって―」

深海の色をした石を縁取る金の優雅な模様、持ち手はさっきまで太陽の光を浴びて高貴に輝いていた白亜。優美なこのロッドは、今錆びないかどうか気になってしょうがない。

先程の太陽は何処にか去ってしまい、今や大粒の雨が降っては僕を困らせる。

あれから二十分経ったが、もしかして向こうは全滅とかになってはいないだろうか。それとも隊を整えるのに時間が？どちらにしろ、疲労と怪我でいっぱいいっぱいのこちらは、もう持たなさそうだ。

「――――――クロット様！」

後ろから男の切羽詰まった声が聞こえる。
ああ嫌だな。こう疲れた時には女性の声が聞きたいものだ。

「…ん、なんだい？」
「高台に居た者によりますと、Ａ班が西口の門に着いたところが見えたそうです！」
「門…？じゃあ後二十分位持ち堪えろってか」
「……そのようで……――――クロット様！」

悲鳴のように騎士が叫ぶ。
何だか想像できた。しかもグルルルル…って聞こえたら確実だ。

僕はすぐさまロッドの先を地面に刺す。すると後ろからバチン、と弾けた音がした。

絶えずバチンバチンと鳴る後ろをさっと見れば、そこにはボロボロの姿の熊（多分）。目玉が片方飛び出している。

「……無残だねぇ…お休み」

開いた手を胸に、刺していたロッドを優雅に横に振る。その仕草に合わせて、ロッドからサファイアの色をした光の粒がサラっと溢れ出た。

それに熊が目を細めた瞬間、振っていた雨粒が集まり固まって槍のように尖る――――それが幾本と別れ、熊を中心に円形になって――――――刺した。

熊は短く息をつき、倒れた。心の中でもう一度、お休みと――――――

「クロット様ぁ！！」

「――――え、」

叫んだ騎士は他の魔物とすでに交戦していた。

彼の声に気付き、ものすごい殺気を放つ方へと振り向いた。

「――――――あぐっ、」

――――と、同時に後ろに吹っ飛ばされた。幸運にも草で生い茂っている所だったのと、雨で土が柔らかくなっていたのとで、酷い怪我はしなかった。

けれど暫く自分を呼ぶ声と視界が定まらない。自分の身体に容赦なく振る雨だけが確かだ。

「グルルルルルルルル…」

…やっと定まった。

吹っ飛ばした相手は同じく熊。しかし先程の熊よりも小さめ。もしかしてさっきの熊の子供か？不味いな――――――剥き出しの歯から白い息が零れてる。目は血走っているし…。

「ロッド…ロッド…あれ、」

無い。何処だ……あ、よりにもよって熊の足元近く。やっちゃったよ。どうしよう。本当にどうしよう。

こうなったら迎えが来るまで避けて避けまくるしかない。

そう僕が意気込み、息を大きく吸い吐く、瞬間、

ヒュッ、

グシャ、……ビチャリ。

目の前でいきなり首が飛ぶ。

頭の無い身体はヨロヨロと数歩歩いて――――血を激しく噴きながら

――――水溜りの中に倒れた。どんどんと血だまりが広がる。
吹っ飛ばされた顔は見ないよう心がけた。そして、「処刑人」の顔を見上げた。

「――――まったく、なんでたいちょーもクロットも熊さんに襲われてるんですか」
走ってきたのだろう、少々乱れた金の髪、出発時にちゃんと羽織っていた団服の白いコートは今は無く、中に着こんでいた服はビリビリに破れていて――――形良い足と、際どい所まで破れてしまったスカートから覗く、黒いガーターが艶めかしく見える。（眼福だなぁ…）
腕まくりしたほっそりとした腕には黒い斧。刃の部分にべっとりと付いた血は天然のシャワーで流されている。

オアシスを見つけたような気分になった僕は、彼女の後ろから先程の熊並みの殺気と苛々とした目に気付く。
此方も所々髪がほつれているクースだった。何故かリーンちゃんの団服（凄いボロボロだった）を片手に、じっとこっちを見ている。
何？妬いてるの？と思ってよく彼の顔を見ている。
すると彼は口パクで――――なんだ？あ、「変態」？「変態」って言ってるのか、なんだ――――…じゃない！
え、そこまで言われる程の事した？誰だってあんな格好されたら見

ちゃうでしょ、にやけちゃうでしょ、え、無視？

「リーンちゃん…だいぶ…遅かったね」
「あ、たいちょーと飴舐めてたら遅れました。……あとそっちのせいでのもありますけど」
「え、僕の…？…って飴舐めてたの！？」
「あんまり美味くなかった」
「ちょ、君達、人が死にかけてる時に何のんびりしてんのさ！」
「……変態なんて死んでも死なねーだろ」
「ヒド！？クース君、僕なんかした？ねぇ何かした！？」
「……ん、しましたよ。クロットが仕掛けた罠がこっちに通知されてなかったから、たいちょーってば何回も引っかかりましたからね」
「死ねよマジで」

ツカツカと近づいて来て僕の横腹を蹴るクース。
あ、なるほど、さっきの怒りはこれか。よくよくみれば足とか腕とか傷だらけだ。
でも何でリーンちゃんはリーンちゃんで服がボロボロなんだろう。
もしかしてアレか、リーンちゃんが罠を発動しちゃってそれをクースが庇ってたのかな。もしそうなら言いにくそうで、ちょっと恥ずかしげなリーンちゃんの事（＋服）も理解できるし。

「何にやけてんだよ変態！」
「ちょ、痛い！！」

またクースがその長い足で僕の事を蹴る。
勘弁してほしい。何か変なのに目覚めそう……。

そんな僕を救ってくれたのは天気とリーンちゃんで、「仕事も終わったし、晴れてるうちに帰りましょー」という鶴の一声でクースは足を止めた。

そしてワザと僕に泥をかけ（子供すぎだよクース…）腰に差したカットラスを整えてからバサリと団服の白いコートを脱ぎ、リーンちゃんに掛けた。

＞i７３２７―４６１＜

遠目から見たらカッコイイ紳士だが、近くに居た僕やリーンちゃんにはそう見えない。

だって顔真っ赤にして「そんな格好で歩かせれるか！」と言って乱暴に掛けてたら……見えない。

対するリーンちゃんはくすりと笑って、「ありがとうございます」と言い、それにクースが明後日の方を見ながら、「べ、別に！上司だからな！部下の面倒見るのは当然だからな！」と叫んで、ご丁寧にボタンまで掛けた。

その際に「あ、何か地味に浸透してきた。これ凄いビチャビチャですよー、濡れますよ…特に足が。あ、胸にまで伝って…」「しゃ、しゃべんな馬鹿ぁ！」などと言った会話をしている二人を見て何だか羨ましくなった。

★

（あー、たいちょーの匂いがするー良い匂ーい…フフフフフ）

（ちょ、怖！？てか匂い嗅ぎすぎ…恥ずかしいから！！）

（えー、いいじゃないですかー）

（……あれ、もしかして二人とも僕の事忘れてる？）

3．意外と仲のいい二人（後書き）

＊「僕らの日常ＳＯＳ！！」のイラスト、更新情報等、灯茄の日常生活が主のブログ→「墓場のリュートと崩れた墓標」ｈｔｔｐ：／／ｋａｄｕ．ｂｌｏｇ．ｏｃｎ．ｎｅ．ｊｐ／ａｖｅ２９１０／コメント等をくれるとすっごい喜びます。

4．隊長さんの憂鬱

最近、こんな噂が王宮の中を飛び回っている。

森の奥にある古びた館。それについての怪談だ。

何でも身の毛のよだつおぞましい男が館の中をうろついているというもの。

――――――その奇怪な姿から付けられたあだ名は「蛆虫男爵」。

別に差別意識があってのあだ名じゃない。本当に蛆虫なのだ。

そんな身の毛もよだつ男、しかし一見美しい顔立ちの青年で、とても優雅に笑って、こちらに手招くのだという。

手招きに応じたくなくても何故だか足はその青年の元へと歩き、『君は……か？』と。

それに対し肯定だろうと否定だろうと意味は無く、口からぼとりと蛆虫を零し、その体は黒く染まり……

「――――――クース・ウェスポン殿？如何なされた？」

「え？」

どこからか嫌な笑いが漏れる。周りを見れば明らかに見下した目でクースを見つめる――――第一部隊の面々。

（ああ、そうだった…今は会議中……）

昨日からまともに寝て無くて、どうにもぼんやりとしてしまうクースだった。
しかもぼんやりしすぎて、この前リーンに聞いた「城周辺の怖い話その６」を思い出してしまった。

「…申し訳ありません。どうにも我らが隊長はお疲れの様です。」
「そのようだ」
「……すみません」

くすり、といつも通りの優しげな声でクースを庇うリーン。
それに対し、第一隊隊長のラグエル＝ヴァロ＝ドールビングがにやにやと笑うのに、少しイラっとしながらも自分に非があるのでちゃんと謝るクースだった。

（はぁ…疲れた…）

――――実を言えば第一隊と第二隊は仲がよろしくない。
貴族の坊っちゃん方の、主に三男坊とかの為の就職先でもある「役立たず」集団である第一隊はむやみやたらと出張りたがる。まともな判断が出来る奴は少なく、しかもそういう奴に限ってすぐ辞めたり低い地位だったりするのだが。

そんなものだから第一隊は戦闘ではまったく利用されていない。
せいぜいが王宮の内の警護とか（どうでもいい所が主だが）、お茶会をする王族や高位のご婦人方の警護とか（リーン・ロッテ曰く「愛人探しの場」だとか）。

それに対し、第二隊は他の隊も従えて騎士団長に代わりその場の指揮をとる。…多分その事がいかに自分達が信用されていないかを公言されている様で屈辱的なんだろう。

「……たいちょー、大丈夫ですか？」

「ん、ああ…悪い」

小声でボソリと…心配そうに話しかけるリーンに、クースは何だか申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

少し息をついてから、こっそりとリーンに手渡された羊皮紙の（急いで千切られた感がある）走り書きされた（それでもリーンの字は綺麗だった）字をさっと読む。

今までの会議の進行具合と説明が求められている個所が書かれており、クースは心の中でリーンに感謝しつつ、その指示に従ってクロット・カルデンがちゃんと仕分けてくれた書類を手に取った。

「あー…先日の南地区での戦闘での――――――」

淡々と読みながらクースは思う。

（俺の部下って普段はアレだけど、こういう時にすんごい役に立つんだよな…いたれりつくせりと言うか）

ああ何て優秀な人材なんだ、と続けて、今日はお礼に何か奢ろう、と決めるのだった。

「――――ごくろうだったウェスポン隊長」

「はっ」
淡々と成果と被害を告げ、騎士団長の労いの言葉で席に着く。
お疲れ様です、と猫の様に朗らかに笑うリーンに、おう、と短く答える二人のほのぼのとした姿に、クースの目の前に座るラグエルは面白くなさそうだ。

「――――――では、先週から続く怪奇事件についてだが……あー、ウェスポン隊長、君は「蛆虫男爵」の話を知っているかね？」
「え？…は、はい」

一息つこうと紅茶に手を伸ばした瞬間、オカルトの話など好きそうにない騎士団長が歯切れ悪く言う。

「普段なら捨て置く話なのだが…実害が出てしまってな」
「実害…と言いますと？」
「…二の姫が、見に行かれたらしい」

その言葉にクースとリーン、クロットの三人は思わず「またアイツかよ！」という顔をしてしまう。
…そう、そんな顔になる位に二の姫ことカトリシア姫は無謀を愛する姫、と言えばまだじゃじゃ馬かー…で済むのだがそうじゃなく、言わせてもらえばお馬鹿さん。
そして、噂大好き・人の迷惑考えない・後先考えないの三拍子が見事そろっている御方…その尻拭いを最終的にするのが主に第二隊なのだ。
もう何度被害をこうむった事だか数えるのも嫌なほどである。

「蛆虫ぶっかけられそうになった所を侍女を盾に何とか避けたそうだ…ちなみにその侍女は今日辞職した」

（（（そりゃ辞職したくなるよ…））））

しかも盾にしたのか、と三人仲良く同じ事を思ってしまった。
騎士団長もどことなく呆れてしまいました感が声に滲み出てる。

「だが急いで逃げた時にドレスは汚れるわ髪は乱れるわで恥をかかされたから何とかしろと言うことだ」
「え、何とかしろって…」
「すまん」
「え、ちょ、」
「――――――騎士団長殿！」

若干投げやりな会話に、急にラグエルが入ってくる。
ごほん、と咳払いをしてから、彼は歌う様に言うのだった。

「その件、ぜひとも我が隊にお任せ願えませんか？」
「君達の隊に…かね？」
「はっ。前々回の様に焼き討ち、などと野蛮な策を使う第二隊ではあの森全て焼きかねません！我が第一隊であれば優雅に――――」
「言わせていただきますが、あの焼き討ち事件はあなたの隊の弓兵が誤って松明を撃ち落として、それを報告もしないで放っておいたのが原因ですよ」

流石にラグエルの言い様が頭にきたのか、リーンが冷めた声で事実を述べる。

リーンの言うその通り、撃ち落とされた松明は枯れ葉の所に転がり、モンスターの住み家になっていた屋敷を燃やし尽くしてしまった。

「うっ…」

「ああでも、第一隊の皆様のそう言うお気持ち、とてもありがたいので私達としては第一隊にお願いしたいです。ね？隊長」

「あ、ああ」

一転優しげな声に変わったリーンは不意にクースに振ると、まさか向こうから頼まれるとは思ってなかったラグエルに言うのだった。

「今回も誰かさんの隊が戦闘どころか事務処理も役に立たなかったせいで、隊長ったら寝不足なんですもの。こういう時ぐらい頑張っていただかないと」

……。

……。

場が凍った。

事実、クースは寝不足で、何度か倒れかけた身としては「こんなの第一隊がやれや！」と思う。が、

（俺の事心配してこんな場で毒吐かなくても…）

わざわざ嫌な役を買う必要ないのに、と申し訳なくなっていると、思い出す。

前回の会議でリーンがラグエルに公然と侮辱された事を。

しかしこんな場でやり返すだなんてまだまだリーンも子供だな、とクースはこっそり溜息をつくのだった。

「…では第一隊に今回の件を任せよう。頑張ってくれたまえ」
「はっ！我ら第一隊、全力を尽くす所存です！」
「……」
怒りに震えるラグエルの代わりに彼の副隊長が凛と答える。
その言葉で今回の会議は終了だ。

「…リーン・ロッテ、お前もう少し大人になれ」
「色っぽく…て事ですか？」
「違う！前回侮辱されたからってこんな場で仕返ししない！陰でこそっと虐めるなり何なりにしろ！」
「仕返しするのはいいのかい、クー…」
じゃれつくリーンに溜息をつきつつ紅茶を一口飲んだクロットが椅子から立つのを合図に三人はさっさと会議室を出る。その際に他の隊から「御苦労さん」と労われた。

「…まぁ、今日は助かったよ。……ありがと」
「きゃー！クロット見て下さいな、たいちょーのデレ！顔真っ赤で可愛いー！」
「ちょ、馬鹿！抱き付くな！……って、クロット！てめぇも何肩に寄り掛かって…離れろ！！」
「痛っ！酷いよクー…リーンちゃんの時はまんざらでもなさそうなのに！」
「んなワケねーだr」「当り前です☆」「お前も可愛い子ぶってんな！離れろ！」「ちょ、やだやだ」…とじゃれ合いながら歩く後ろ

から、カツカツと靴を威圧的に鳴らしながら、ラグエルがクースを呼ぶ。

振り返ると、怒りに染まった顔がクースの目に入った。

「調子に乗らないでいただきたいな」

開口一番、ラグエルはクースとリーンの二人を睨みつけて言うのだった。

調子に乗ってねーですあなた達が使えないのがいけないんでしょ、とリーンがぼそりと言うと、クースはリーンの横腹を軽く小突いた。

「…調子に乗っているつもりはありませんが」

「ふん。どうだかな！…いいか、幾ら家が名家だろうとお前は所詮次男「あなたは三男坊ですけどね」…リーン・ロッテ嬢！口をはさまないでいただけるか！」

名家だろうが次男坊の期待の薄い奴が邪魔してんじゃねーよ！と言いかけたラグエルを毒で制したリーンの口を手で押さえ、クースはだんまりを決め込む。

「ふん、君たちは指を咥えて黙って見るがいい！僕達第一隊が勝利を収め、これを機に栄誉を受けるのをな！」

擦れ違う際にわざとらしくクースを押しのけてラグエルは去っていった。

「あの坊っちゃん、フラグ立てちゃいましたね…」

「だね。オチが見えるよオチが」

二人でこそこそっと（しかし声は小さくない）フラグ云々言う傍で、クースは自分の兄も昔の自分に対してこんな想いを感じていたんだろうか…とラグエルの後ろ姿に昔の自分を重ねて溜息をついた。

――――そして三日後、出兵した第一隊が作戦失敗した報を苦笑いの騎士団長から聞くことになる三人だった。

★

（また仕事増えたな…）

４．隊長さんの憂鬱（後書き）

＊ものもらいのブログの、
「Ｗｅ'ｌｌ　ｂｅ　ｌｉｋｅ　ａ　ｓｔａｒ！」ｈｔｔｐ：／／ｋａｄｕ．ｂｌｏｇ．ｏｃｎ．ｎｅ．ｊｐ／ａｖｅ２９１０／では作品のイラストや更新情報が更新されます。荒らしの方以外はどうぞお寄りください。

5．夜回り騎士さん

？麗しき人、愛しき暴君、情熱の女神。ああ、何ゆえに我らは結ばれぬのか。

貴女のその真珠の肌に触れたくとも、この手は風を切って跳ね飛ばされ、高貴なる唇に愛を囁きたくとも近づくことすらできぬ！

嗚呼、今ほど貴方を憎く、愛しく思った事はない。この全てを殺めかねない衝動を、貴方の天上の御使いのような清らかな腕で抱きとめてくれたなら！？

＊

「――――その吐き気と鳥肌が出る台詞はなんだ」

「知りませんか？巷で人気の恋愛小説、ＳＭ　ギリギリの恋愛…いや愛憎…うーんと、……常識人の女性に粘着する残念なイケメンの悲恋物語？です」

「え、ＳＭ…」

「最初は普通に対応してたんですけど、引っ叩いたら目覚めちゃって、主に彼の駄々漏れの妄想の中でＳＭしてます」
「うわーあぁ…」

あの会議から二日経ち、仕事も一段落したリーンとクースは久し振りにぐっすり眠り、ゆっくり湯に浸かれて疲れを癒すことができた。

ちなみに今は夜中。
二人で郊外を見回り中――――というか、作戦決行中の第一隊の『もしも』の時の為に控えているというか。
第一隊は最初に隊長が十数人を討伐に向かわせたが失敗し、こうなればと大所帯で行こうとして騎士団長に駄目だしされた後、隊長と中でも優秀な五人程度のメンバーを編成したらしい。
しかしどうにも不安が拭えない団長はリーンとクースに近くの見回りも兼ねて彼らの後始末を頼んだ。

――――最初は文句ありげな顔をした二人だが、手当の額（珍しく高給）に折れてその命を受けた。
せめてクロットがいてくれると有難いのだが、彼は急用で実家に戻っている。第二隊に彼以外の魔法使いは少ない上に、彼以外は動きまわりながらでは魔法が扱えない為、結局二人のパーティーになった。

少し人数的に心許無いものの、使える人材は先の戦闘で怪我をして療養中か休みで連絡がつかないので、足手まといを使うよりは気心の知れた相手で、ということらしい。

「――――最後はストーカーになり、さっき抜粋した台詞を吐いて相手と無理心中しようとするんですけど、お兄さんと婚約者の警吏に阻止され殺されちゃうのです」
「警吏が市民を殺していいのかよ…」
「勿論悪いです。法の下に裁かねばいけないのに殺してしまった婚約者は、ストーカーの遺体を底なし沼に放り投げるのですが――――這い上がってきます」
「底なし沼なのに！？」

そして第一隊の帰りを待つ間、暇な二人はシートを広げ、夜食にサンドイッチを食べながら雑談中、という訳だ。

最後の一欠片を放り込み、のんびりと語るリーンに、クースは「それもうホラーじゃねえか！」と卵サンドを口に頬張りながら突っ込む。リーンはハンカチで自分の口元のパンカスを拭いながら続けた。

「そこから生き返った彼は体中蛆虫だらけ、美しい目はぽっこり零れ落ちた姿でズルズルズルズルとヒロインの家に向かいます。ぶよぶよの手でドアを叩き、生前の悩ましい声でヒロインに開けてくれと言うのですよ…」
「オイ待て、今回の任務前にその話はマズイ！」
「ヒロインは肉が汚らしい音をたてて落ちていくのを扉越しに聞きながら…」
「だからぁ――――！！」

口元のカスを親指で拭って、クースは「続けんなって言ってんだろ」

の「つ」の形に口を開いた途端、

「――――ぎゃあああああああああああ！！」

……と絶叫が。

「ひゃあああ！？」

「…たいちょー、急に抱きつかないで下さい。サンドイッチが…」

「馬鹿馬鹿！食い物なんてどうでもいいだろっ」

何だあの叫び声！？とクースは声の方向に顔を向ける。

すると、燃える火の塊がこちらに突っ込んでくるのが見えた。リーンがすぐさまランチセットを片して避ける準備を終えた頃には、その火の塊の前に人――――第一隊の面々が疾走しているのに気付く。

「あ、あああああいつら何してんだ！？」

「壮絶な鬼ごっこですね」

「鬼ごっこってレベルじゃねーぞ！おい、リーン・ロッテ。あの火、消せるか？」

「……土ならふっかけられるんですが」

渋い顔のリーンは簡単な魔法しか扱えない。

唯一満足に操れるのは重量操作ぐらいで、それを操って大振りの斧をぶんぶん振り回している。

親友の魔法使いから根気よく教えてもらっているものの、クロットくらいの魔法使いから見ればヒヨッコみたいなものだ。

「何でもいいから火を消せ。下手すると森に移るぞ」

クースがハラハラしながら腰に差したカットラスに触れる横で、リーンは懐から呪文をメモった手帳を取り出すと、恐る恐る詠唱を始めた。

「――――？豊饒の大地よ、踊り狂う彼らを抱きしめよ。彼らが眠り、汝に還るその日まで……？」

凛と詠い終える最後に、「うぁー、成功して下さいお願いします」の一文が無ければ、クースはちょっとだけリーンに見惚れる事が出来たのだが。リーンはクースの「こいつ勿体ねーわ」の視線に気づかずに、手を組んで火の塊を見つめた。

ぽと。ぽとぽとぼとぼど…ずしゃあああああ。

大変優雅でも美しくない顕われ方をした土は滝のように火の塊に襲いかかる。

終いには土で埋まり、リーンは「やったぁ！たいちょー！先週習って二回成功したっきりなのに出来ましたよー！」とぴょんぴょん跳ねた。

クースは「失敗する可能性大かよ」とか思いつつ、棒読みで頑張ったなと褒めて第一隊と土の山の元に走り寄る。

「おい、どうした？」
「ウェ――――ウェスポン君か。先発のグループから聞いて無いアクシデントが――――屋敷の奥で、魔物が何匹かいるのだ」

第一隊隊長ラグエル曰く、怪しい気配の無い、まったく静かな屋敷だったとのこと。

先発メンバーが遭遇した部屋に向かうも標的は居らず、奥の方に侵入した所、そこを通さぬと言わんばかりに魔物が襲いかかって来た。魔法使い（新人の女性）が焦って火力を上げ過ぎ――――――逃げて逃げて此処に。

「んー、たいちょー、どうやらこの熊さん、死んで何十年かは経ってますよ」
「リーン嬢、何故それ――――――――僕の剣で何をする！？」

華美な剣で土を掘り、魔物の焼け加減を見ていたらしいリーン。そしてその華美な剣の持ち主であるラグエルは、取り返そうとして自分の足に躓いてこけた。

「剛毛は焼けてますが肉は焼けてません。て言うか肉……腐って…うわぁ内臓が！？」
「くっさ！早く土をかけて埋葬してやれ」

「やめろ！僕の剣をなんだと思っているんだ！」

淡々と調べる二人を睨みつけながらラグエルが怒鳴る。
するとリーンは色々なもので汚れた剣を鞘に戻すと、「どーもありがとーございましたー」とぞんざいに返した。

「うぅ…僕の剣が…臭い…」
「剣が臭いって…中々聞かない言葉だよな」
「そうですね。聞かなすぎて鼻が曲がりそうです」

十字を切ってリーンは神への言葉を捧げる。
それを横目に、クースは自分たちが受け持つことと団長への報告云々を顔色の悪い剣士に頼んだ。

魔法使いと剣士の女性に支えられ、ラグエルは涙目で二人をきつく睨んで「せいぜいお前らも襲われるがいいさ！」と残して背を向ける。

リーンはそれにプー、と笑うと、「どうします？」とクースを見上げた。

「とりあえず標的の居場所は不明、奥には魔物が数匹――――あと、アイツの言い分だとリーダー格なんだろうな」
「……何と言うか、死闘になりそうですね」

「まあ、どの道ちゃんとした人間が探らねーといけねぇし…ぎりぎりまで頑張るか。最近事務仕事ばっかだったし勘を戻すのに丁度いいだろ」
「頼もしーですこと」
「ヤバくなったら土で埋めたれ。……成功するといいが」
「何十回も詠唱すれば一回ぐらいは成功しますって」

その言葉に、クースはやっぱ帰ろうかな、なんて思った。

★

（ランチセットどうします？）（その魔物に供えてやれば？）

6．ちょっとした遊び心

「じゃあ、開けますよ？いいですね？」
「……う、うるせーなっさっさと開けろ！」

森を抜け、だいぶ拓けた――――幽霊屋敷のように不気味にそびえる屋敷の扉の前で、リーンは斧を片手にクースの顔を窺う。
対するクースはカットラスを抜いて視線を泳がせてそっけなく答えた。

「本当に行きますよ―？…おじゃましまーす」
「おまっそれで返事がきたらどうする！？」
「いっらしゃいませー（裏声）」
「馬鹿―！」

ふざけるリーンの隣にぴったりくっついて、クースは恐る恐る室内を見渡す。
クースの実家は元より、リーンの実家よりも狭い館の中は全く静かで異様に寒い。

――――――――ごくり、と唾を飲み込んで、クースはやっと一歩を踏みこんだ。

「手前から行きます？」
「そうだな…手前、から…」

ぎしぎしと鳴る階段を上る。平然としたリーンの顔を盗みつつ、彼女の斜め後ろで、剣を強く握りしめた。

「ん？……隊長！」
「いやあああああああ何！？何だよぉぉぉぉ！！」

急にリーンの手――――――クースから見れば謎の手が急遽視界に迫り、尖った声で呼ばれたクースはリーンの服の裾を握りこんで、カットラスを放り投げて頭を庇う。

リーンは自分の得物を放り投げるくらいパニックに陥った上司に溜息を吐いて、自分の服の裾を掴んで離さないその手に触れた。

「…落ち着いて下さいな。ただ次の段は穴が空いてるので気を付けて、と言いたかっただけなのです」
「えぁ…手は？」
「私の手です。そのまま足を突っ込もうとしてたので」
「……ううぅぅぅぅぅぅ」

自分の情けなさと怖さに、クースは唸り声を上げて座り込んだ。

リーンは冷や汗をかいて固まっているクースの腰をぽんぽん、と叩

いて落ち着かせてから、「カットラスを持って来ますから待っていて下さい」と腰を上げる。

「まっ――――――待て待て待て待て！！ひ、一人はやだ！」
「すぐそこですよ。古時計にぶっ刺さってるの抜いてくるだけですから」
「俺も行く！あ、あんな距離まで戻るくらいへ、平気だっ」
「……俺『も』なんですね」

リーンだってこういう雰囲気に強い訳ではない。
ふざける事で誤魔化しているのと、ただ隣に怖がって泣きそうな人がいるから冷静でいられるだけで――――――――内心、自分で取りに行く！と言って欲しかったのだが…。

しょうがなく、二人はそのまま階段を降りる。
懐のナイフに手を忍ばせたクースに間違って斬られないように注意しつつ、苔が生えてたり腐ってる床を踏みしめて、そろそろと古時計に近づいた。

「ぬ…抜いたら……バーンとか、無いよな…？」
「バーン、って何ですか…」

おま、バーンはバーンだよ、と本人もよく分かって無い事を口走りながら、きゅ、と靴を鳴らして古時計の前に立つ。
そして物の見事に突き刺さっている剣にびくびくしながら手を伸ばすのを尻目に、リーンは新鮮な空気を求めて窓に近寄ろうと――――

――二三歩クースから離れた。

「うわぁぁ…」と泣きそうな声のクースを背中に、もう一歩踏み出し……背後で何か動く気配が。

「たいちょー？もう抜けた…んです…か…」

――――――リーンのどんどん掠れていく声に、何とかカットラスに指先を触れたクースが「あん？」と振り向く。

そこにいたのは黒くてぐじゃぐじゃした――――なんとか人の形をした、『何か』。

リーンはずるり、と斧から手を離す。半開きの口に、身体は震えていた。

「やっ――――――！」

「避けろぉ！」

今度は躊躇わずに古時計からカットラスを抜き、異様な雰囲気のそれに斬りかかる。横に薙ぎ払うクースの手に、ぶちゃぐじゃと嫌な感触が伝わった。

悪臭放つそれは、ぎぎぎとクースの方に振り向くとゆらゆら揺れ始めた。

どうにも向こうの出方が分からないクースは少し距離をとって様子を窺うと、視界の端で青白い顔のリーンが手帳を開くのが見えた。

「――――？豊饒の大地よ、踊り狂う彼らを抱きしめよ。彼らが眠り、汝に還るその日まで……？」

しん……。

震える声の詠唱は、どうやら失敗したらしい。

リーンが手帳を急いで捲るの捉えながら、クースはとりあえず腕に狙いを定める。

蛇のように飛んできた腕を屈んで避け、下から斬りかかって横に転がり、剣を再度構え――――

「う、あああああ！？」

クースは構え直さずブンブン剣を振った。

斬りつけた部分の刃は白い液が付き、そこから蛆が沸いている。どんどんと沸いている。

真っ青な顔をしたクースにゆらゆらと近寄り始めたそれ。それは、つまり、標的の……「蛆虫男爵」と噂された化け物。

「――――――……を、与えよ！」

掠れた声で、気づかれないようにリーンは詠う。

スゥ、と冷えた空気がクースを包み、男爵はピタリと活動を止め、カットラスに沸いた蛆虫は何処かに消え、清浄化された剣を強く握りしめた。

…リーンは下級とはいえ神聖魔法を扱った為に顔色が悪い。恐らく魔法はもう使えないだろう。

本人もそれを理解して、手放した斧を拾い上げた。

「やぁ！」

「――――――」

リーチの長い斧は男爵の背を横に薙ぎ払う。

再び動き始めた男爵が完全にリーンに振り向く前に、クースがその脇を斬り裂く。

すると男爵は黒いその頭からぱっくり割れた口を開くと、声ならぬ声を上げる。

リーンは背後から漂う腐敗臭に振り向くやいなや、「不利です！外に――――――いえ、上に逃げましょう！」と叫んだ。

彼女の背後からは数匹の魔物が。扉の隙間からも何匹か覗いている。

クースは頷いて階段を駆け上がった。

★

「――――――――…どこが『一見美しい男』だ！ただの黒い塊だぞ！？」
「多分…ラグエルの馬鹿野郎が騒いだのに反応して戦闘形態になったんじゃないですかね……手招いたのに反応する前に、他の魔物に夢中で魅了されなかったんじゃ……」

聖水を部屋のぼろい扉の前にかけ、リーンは一気に消費した魔力のせいで苦しい身体を両手で抱きしめた。

「ああもう、最悪この窓壊して逃げるしかねぇな……おい、生きてるか？」
「肩で息してるんですから…分かって下さいよ」
「お前、顔が真っ白すぎて死人みたいなんだよ……やっぱり今は帰ってクロットを連れて出直すべきだな」
「……嫌です。ラグエルの変態野郎に鼻で笑われるじゃないですか」
「おまっどんどん呼び方酷いじゃねーか…じゃない、意地で死んだらどうにもなんねーぞ。第一ただでさえ少ない魔力消費したんだぞ」

「す、少ないって――――！たいちょーの、馬鹿っ」

ぷう、と頬を膨らませて、リーンはそっぽ向く――――前に、クースがその両頬を押さえた。

「誰が馬鹿だ。…いいか、とにかくアイツは鈍いし強くない。けどな、仲間は呼ぶわ俺のメンタルがんがん削るわで戦い辛い相手だ。最悪お前がぶっ倒れても俺が担いで逃げるとか一人で突っ走っても成功する見込みはゼロより少しあるくらいだぞ」

「……見栄張ってもゼロより少しあるくらいなんですか」

「見栄張る言うな！正当な評価だ！！」

ぐに、と両頬を抓って、クースは声のトーンを落として続けた。

「――――――――逃げたからって、臆病じゃあない。逃げる、って判断するのも勇気がいるからな。……それでも面子が気になるなら俺の判断だって言えばいいだろ」

「…あなたの、……あなたの名誉を傷つけてまで、守る面子はありません」

そっとクースの手に自分の手を重ねて、リーンが小さく「了解しました」と見上げると、クースは急に恥ずかしくなったのかパッと手を離して立ち上がった。

リーンも立ち上がってクースの背を追おうとして――――――立ち止まった。

「……？どうした？」
「…たいちょー、あのですね、私、夜食食べてる時に話してた本、あるじゃないですか」
「ああ？…ああ、」

？知りませんか？巷で人気の恋愛小説、ＳＭ　ギリギリの恋愛…いや愛憎…うーんと、……常識人の女性に粘着する残念なイケメンの悲恋物語？です？

？そこから生き返った彼は体中蛆虫だらけ、美しい目はぼっこり零れ落ちた姿で――――――？

「……おい、あれは…創作だろ」
「ああうん、そうなんですけど、あれってふざけた内容ではありますが時々リアルというか。噂だと作者の『曾祖母の話』とかなんとか」
「……いやいやいや、関係ないだろ。関係ない」
「でも、人間の姿で相手を魅了して引き寄せて、何か尋ねてくるんですよ？両方とも蛆虫男なんですよ！？」
「そうだけど！…やめろ、もうホラー小説とか怪談とか聞けなくなるだろ、『もしかしたらこれも本当にあって…』とか思っちゃうだろ！？」
「怖かったら教会に行って神父様から御加護の装飾品買ってくればいいじゃないですか！」
「あんな俗物的な所、誰が行くか！クロットに泣きついた方がまだマシだ！」

「じゃあそれでいいじゃないですか！…とにかくですね、もしそうなら――――――」

かたん。

「「……」」

遠い所から、かたん、ともう一回音がした。

「……もしそうなら、なんだ」

「彼が被害者たちに尋ねているのは恐らく、彼が恋に落ちた女性の事だと思います。作中、彼は自分を殺した婚約者達ではなく、毎夜、彼女の家まで会いに行くのですから」

「しつこい男だな！」

「だってストーカーですからね。……とにかく、そのヒロインは黒髪なんです。ストレート…だったかな、腰ほどの髪で――――――あとは分かりますね」

「…分からん。ていうか、分かりたくない」

こつん、と一歩近づくリーンに、クースもまた一歩下がった。

「ちょっと裏声出すくらいです。…あ、彼女の名前は『ミーシェリシェアメリアーナフェリネ』と言います」

「長っ！しかも噛みそう！！」

「愛称は『ミーシェ』。ストーカーの名前は『ピネスタパッチェン』。ピネス、て呼べばいいかと」
「何だその料理で出てきそうな名前！？お、俺がそのミーシャ？とかいう女の真似したらあいつ満足して消えんのかよ！？」
「ミーシェです。…多分抱きつくなり殺すなりすると思います。最後ヤンデレになってますからね。とにかくデレ……いや、再会の喜びに浸る瞬間、隠れていた私が首を刎ねます。たいちょーには出来るだけ気を引いていただきたいです」

がっしり腕を掴むリーンの顔は相変わらず青白いが、打開策が浮かんで嬉しいのか少しだけ輝いている。

クースは自分の心臓の痛みに、段々と目が熱くなってきた。

★

【少し前、ある主従の話】

「ねぇ、知っていて？あの馬鹿女……ああ失礼、麗しくて夜会の宝石と称えられはしても頭の中は石っころ、もしくは腐った豆粒の、私の二番目のお姉様。無様に逃げてからずぅっとお風呂で騒いでるそうよ？」
「ああ……彼女付きの侍女が大変可哀想な目に遭ってたね」
「あの女に仕えてる奴なんてどうでもいいのよ。……私が言いたいのはね？情けなく逃げ帰ったその様が王家の名にまで恥を塗って塗って塗りまくっているってこと」
「…お、おお？」
「だから、王家で最も高貴で素晴らしい才の持主たる私が、恥を返上する為にも、怯える民の為にも、今回は私が助力いたしましょう？」
「……ルシェ…どうしたの、急に…そんな人格者に…いてっ」
「――――まぁ、本当はお父様に恩を売って、あのババアと女に嫌味を言って、素晴らしい休暇が欲しいだけなのだけど」
「ですよねー…」

「あ、でもさ、別にルシェが出なくても……第二隊がいるじゃない」
「……知っていて？あの手の怨念の塊はね、焼いても埋めても駄目なの。聞くのは神聖魔法唯一つ…そして、第二隊所属の私の二番煎じ男は今、休暇中。高度の神聖魔法が使えるのは……さぁ、誰でしょう？」
「神父様！」
「ああロスト、貴方のオツムまで姉様と同等程度になってしまったなんて嘆かわしいわまったくふざけてんじゃないわよ貴方の御主人様に決まってるでしょ、やり直しなさい」
「……この国一素晴らしい魔法使いで高貴な姫であるルーシェット様です我が主です！お願いやめて掴まないで頬痛い！」
「ふん。あんな歩く屑が私よりも上、だなんて死んでも言わないこ

とね。いい、貴方の御主人様は全てにおいて優れているのよ。肝に銘じなさい」
「そうひゃね…ルシェは頑張り屋さんだもんねぇ…にゃー！！」
「こ、この……馬鹿っ」

★
その頃のリーンとクース←
（ちょ、泣きそうな顔しないで下さいな）（うるせー！俺はっ本当にッ駄目なんだよ、こういうの！）

7．しばらく寝れない。

これまでの「僕らの日常ＳＯＳ！！」は☆

・たいちょーとキャッキャウフフな夜食タイム！
・クソったれ一回死ねばいいのにと何度思った事か分からない５人ぐらい恋人がいるらしいけど絶対顔に騙されてるしねーよ、マジねーよと面と向かって吐き捨てたい坊っちゃんで騎士とか隊長職に就いてるとかマジありえん野郎、ラグエルさん御一行による壮絶な鬼ごっこ
・頑張って二人で倒しちゃうお☆
・囮作戦Ｑを実行しようぜ！

「――――お前ぇぇぇぇ！！現実逃避もいい加減にしろっ、二つ目の長い愚痴が吐けれるんならしっかり走れ！メンタルが死亡寸前なのは分かるけど！！」
「……ふふふ、頭から蛆頭から蛆頭からう「怖っ頼むから正気に戻ってお願いだから！！」…蛆…」

律義に突っ込みながら、クースはリーンの腕を引っ掴んで夜の森を走り抜ける。

――――冒頭の「囮作戦Ｑ」を実行した際に、見事スパンと飛ばした頭から零れる蛆をモロに見たリーンは、只今絶賛逃避中。いつもの夏の花のような笑みを浮かべる顔は、死神に死を宣告されたような顔をしている。

引っ張るクースもまた同じ心境だ。
恐る恐る裏声で男の名を呼んだ途端、男は喜色の滲んだ声と共に抱きつこうとしたのだから。……唯一の救いは男が噂通りの美しい姿に戻っていた事ぐらいだ。
そして目の前で処刑人さながらにリーンが飛び出して男の首を刎ねた瞬間を見――――そうになった訳で、リーンがこんな状態にならなければ同じく呆然自失になっていたに違いない。

……ちなみに彼らの後ろには、黒くてじゅぶじゅぶした塊が追いかけてくる。もの●け姫の祟り神みたいな姿だ。

「たいちょー…私、たいちょ―の事…嫌いじゃなかったです…」
「馬鹿っ下手な事言うな！今マジで死にそうなんだぞ！！」
「だって…たい――――たいちょー、伏せて下さい！！」
「は…」

圧し掛かられられて、二人はゴロゴロと地面を転がる。
それと同時に黒い腕（触手のようなの）が目の前にあった木を貫くのを見て、クースはそのままリーンを抱いて草の中に潜り込んだ。

「い――――」
「静かに。気づかれる」

きょろきょろとした後、男（と呼んでいいのか正直分からないが）はすごすごと向こうに去っていく。クースはリーンの口を塞いでいた手を退かし、溜息を吐い――――息を飲んだ。

（…あれ、待て、何でだ。……何だこの体勢！？しかも左腕…いやいやいや、考えるな感じるな、さり気なく退かｓ――――）

「た、たいちょー…あの、お、お盛ん（？）ですね…？」

「違ぇぇぇぇぇ！！」

叫び、リーンの豊かで柔らか…ごほん、胸に下から突っ込んだ腕を抜こうとして――――リーンがびくん、と肩を跳ねた。

彼女を抱き留める形で胸に触ってしまっていたと思っていたクースは、温かくて滑らかなそれを見下ろして死にたくなった。……リーンの胸元は、転がる工程で服が裂けていたのである。

クースも同じく服が擦り切れたものの、リーンは元々胸元を出す格好だったから……あれだ、不味い。すっごく不味い。

「…あの、う、動いても、いい、か…？」

「へ、変に動かないで下さいね…？」

そろそろと指をピクリとも動かさないように注意して、そっとその谷間から手を離そうと――――

「きゃー！」

「いやぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「ひあっ！？」

急に響く悲鳴に、クースはしっかり、がっちりとリーンの胸を掴む。対するリーンはいきなりのそれに、思わず肘鉄をかました。

「げほっ…くそ、」

「ごごごご、ごめんなさい、お、思わず…」

「いや、お前の反応は間違ってない……けど、なぁ！！」

「――――何で姫さんが此処に！しかも悪ふざけしに来てんだよ！？」

くすくす、と笑う声を睨みつければ、「姫さん」こと第三王女、ルーシェット・S・カーレン殿下が見下していた。…そう、見下していた。

その背後には柔らかな印象を受ける騎士が佇んでいる。

どこか困ったようなその顔はクースそっくり――――というか、彼の双子の兄、である。

「兄貴まで…！あいつ――――じゃない、姫さん連れて何してんだよ！しっかり仕事しろ！あとじゃじゃ馬も卒業させろってんだ！！」

「じゃじゃ馬……！？…貴方！その言い草、私自らの手で罰されたいらしいようね…！」

「本当だろうが！お前この前だっ「動かないで下さい！」ご、ごごごごご、ごめんっ」

「あーあー、最低だわ。魔力が尽きて上手く動けないのを良い事に無理矢理……騎士の風上にも置けないわね！」

「へ、へへへへへ変な言いがかりしてんじゃねーよ！これはっ事故だ

！……っと」

叫んだ割には静かに、さっと手を抜かれる。
リーンは胸元を引っ張ると、牙を向き合っている二人を呆れながら見遣り、同じく呆れているクースの兄――――ルーシェット付き近衛騎士、ロスト・ウェスポンに声をかけた。

「…お二人とも、何用で？」
「ええと、ルシェが…善意で、手伝いたいって」
「はぁぁぁぁぁ！？手伝うー？姫さんに手伝ってもらわなくても結構だっつーの！」
「あーら、無知で粗野な貴方は知らないでしょうけど、今回の件は神聖魔法無くして勝てなくてよ！斬っても無駄！埋めても無駄よ！」
「…くっ、リーン・ロッテ！もう一回アレ――――あ、いや、いい。何でもない」

勢いよく振り返った先のリーンは未だに顔が白く、クースはぎこちなく顔を戻した。

「ね？私の助けが必要でしょ？『ルーシェット様の慈悲の有難みも分からぬ愚かな私を御救い下さい』って言いながらその小奇麗な顔を情けなく土に擦りつけて縋りつきなさいよ」
「――――～～ッ」
「……はぁ、――――ルシェ、お願いできませんか？」
「いいわよ！」
「おいいいいい！！何だよこの差！？何でリーン・ロッテが一言頼

んで頭を下げただけで了承するんだよ！！」
「あったりまえでしょぉぉぉ！？あんたとリーンを一緒にしないで！」

「……あー、団服新調しないと」
「綺麗に裂けちゃってるね……はい、」

え、悪いですよ。寒いでしょう？、大丈夫だよ。女の子が寒い思いをする方が悪いよ…と互いに噛みつかんばかりの二人の後ろでコートの押し付け合いをしていると、それに気付いた二人がばっと振り向き――ルーシェットは勢いよくロストに抱きついた。

「貴方の弟さんが虐めるの！」
「兄貴から施しを受けるな！」
「……うん、」
「こういう所だけ気が合うというか何というか…」

とりあえず宥めようとしたのか、毛が逆立った子猫のようなルーシェットの気が済むまで撫でてあやしているロストに、クースはリーンから奪い取ったコートを投げつけた。

そして自分の少し汚れた団服を潔く（というか勢いよくというか…）脱ぐと、リーンの頭に被せた。

「わっ！？」
「しょうがないからそれ着てろ」
「いや、悪いですって。別に寒くないですし…むしろ燃料切れなん

で横になって休みたいです」
「寝るのは我慢しろ。それに寒くないって…お前、震えてるだろうが」
「ああこれですか？吐き気です」
「余計悪いじゃねーか！？」

さっさと袖通せ！とだけ言ってそっぽ向くクースにごちゃごちゃ言いつつ、リーンはこっそり袖に顔を近づけた。

「あんなに暴れ回ったのに花の匂いがする…だと…！？」
「嘘―……やだ、本当。顔といい匂いといい―――ムカつく男ね」
「何嗅いでんだよ！？」
「…ロストさんもこんな？」
「ロスはお菓子か紅茶の匂いがするわよ」
「兄弟揃って乙女のような匂いって……流石双子というか…姉妹に生まれた方が良かったんじゃないでしょうかね」

こそこそっと（傍から聞こえてるけど）内緒話に花を咲かす二人に、クースは青筋を浮かべて耐えるように手をきつく握り締める。その隣で、ロストはぽん、と弟の肩を叩いた。

「―――まあお嬢さん方、そろそろじゃれ合うのもやめないと。いい加減……来ちゃうだろうから」
「「……」」
「やだわ、二人して何で急に遠い目をしてるの？」
「ルシェ…人の傷口を抉るのはよくない。そっとしておこう」

ロストの諭すような声に「ふーん」と返すと、ルーシェットは今着ている真っ白でふわふわした服のように無邪気に微笑んで、夜の木々の向こうを指した。

「来るわ」

――――まるでその言葉が合図であったかのように、木々を薙ぎ倒して最早「化け物」の定義にしっかり当てはまっている男爵が、ぼたぼたと黒い塊を落としながらまっすぐに迫り来る。

ロストがするりと美しい細剣を抜き放つのに次いで、クースも転がっていたカットラスを拾い上げて素早く抜いた。
無意識でほとんど同時に鞘を地に落とした双子は、飛んできた黒い触手のようなそれを、己の騎士の剣でもって迎え撃つ――――！

（……流石、若手ナンバー1とナンバー2…）

荒々しさが目立つクースと、悠然と構えるロスト――――静と動のまったく逆な双子はこの国の中でも特に秀でた騎士だ。
流石にロストも経験の差や諸々から騎士団長には勝てていないが――――恐らく、彼を抜く日はそう遠くは無いだろう。

容姿端麗、天才と秀才、天然でタラシな子と口煩くて素直じゃない子と…性格が少しばかりアレだが、こんなハイスペックな双子を輩出したウェスポン家の、名家と称えられるその血筋は確かである。

「…たいちょー、私の斧(エモノ)がありません…」
「あぁ？…そりゃあ、逃げる時に放り投げたから、なっ――――と」
「はは、大丈夫だよ、ルシェが何とかしてくれるから」
「お前…主人頼りかよ…」

背中合わせに戦う二人の平時のような会話に、恋に狂った男は怒りを覚えたらしい。

荒れる触手は今までの調子を壊してバラバラに飛びかかってくる。…クースは絶対認めたくないだろうが、最悪の状況を回避できる人間が二人もいるおかげか…肩の荷が降りたというか――――好い具合に緩んだ身体は、下手な手を打つ事なく不意を打った攻撃を斬り捨てた。

「――――」

彼らの後方、リーンの隣で、ルーシェットを中心に花弁が開いていくかのような光が溢れる。
溢れて零れて散っていった白亜の光は消える事なく、騎士の剣に吸い込まれた。

「おお？」
「剣に加護を付けたわ。少し長い詠唱に入るから、それまで馬車馬のように働きなさい」
「ありがとうルシェ――――…って、リーンちゃん？」
「しょうがないのでナイフでやれるところまでやります…よいしょ、」
「……え、ちょ、馬鹿っお前何てとこに…！！」
「太腿に予備のナイフ入れてたっていいじゃないですか。昔は冗談

で胸元に入れようかとは思ってましたけど」

第二隊お色気担当とは私の事です（キリッ）と言い放つリーンは、するりとその白い太腿に隠したナイフを取り出す。
するとだいぶ攻撃の手も緩んできた分、手を抜いていたクースは――――顔を真っ赤にして、言葉にならぬ声で、悲鳴なのか怒声なのか分からない奇声を発した。

「リーンちゃん、…その、スカート……捲れてる」
「あらまあ」
「あ――――？あらまあ？じゃないだろうがッはしたない！」
「もうっすぐ直したじゃないですかー！」
「てめっ投げんじゃ……ああ、どうも」
「いーえ！」
「……仲良いよねぇ、君たち」

真っ直ぐにクースの肩に迫った触手をナイフで牽制したリーンは、顔を膨れ面のままクースの団服からナイフを取り出す。もう一度太腿から出した予備のナイフも両手に、しっかり握りしめた。
そして髪を弄りながら詠うルーシェットの前に立ち、双子が侵入を許した黒い滑り気のあるそれらを斬りつける。
…そもそも双子が取り零す事がそうそう無いので、量は大したことは無い――――楽な作業になりそうだ、と白亜の光を吸い取ったナイフの刃を見つめた。……その時、

×××××××――――――!!

勝ち目が無いと見た男爵が、鋭く、例えようのない切れ味の絶叫をあげた。
四人とも思わず耳を押さえるその音の暴力に、固まっている彼らの背後から――――増援が。

「――――チッ」

残念ながら舌打ちをしたクース達の、ではない。異形の男爵の、だ。
数よりも視界の暴力に対して、リーンは思わず鳥肌がたった。

（あの熊さんは…ラグエルのくそったれを追っていたのと同類…？
でもアレより…腐敗が進んでるし…）

しばらく肉料理が食せなさそう……と、現実逃避に走りかけたのも束の間、深呼吸を一つすると、リーンは一直線に駆けだす。
示し合わせた訳でもないのに、目を見合わせたルーシェットは――――今までの詠唱を切り捨て、リーンへの補助の魔法をかける。
うっすらと身体に燐光を纏わせて、彼女はひとまず鳥のようなモンスターの細い喉元を掻っ切った。

「――――…リーン・ロッテ！」
「こちらは私がやります！たいちょーは、そちら、を！」
「無茶を――――くそっ」

仲間を呼び終えた男爵は緩やかだった攻撃の手を強め始める。
ロストはクースと顔を合わせると、ルーシェットの近くへと下がった――――最悪、姫君（ルーシェット）だけでも無事で済むように、だ。

ロストが下がった分、クースへの攻撃が増えて掠り傷が増えていくものの、ルーシェットの詠唱から溢れる光りが触れては癒していくので、被害は自分の服と少量の血を無くすくらいである。

「?白く、清く、尊く。貴方の威光は何よりも優しく、しかし無慈悲に彼らを裁く?」

ルーシェットが詠うのを背に、やっと二体目を倒し終えた。
どんどん溢れる清浄の風に、男爵や呼ばれたモンスター達は危機感を抱いてざわざわと騒ぎ始める。中には彼女を狙って迫るものもいたが――――それらはロストが全て斬り伏せる。

「?まず貴方は彼らに罪の証たる枷を与え、己の罪深さを思い知らせるだろう?」

がちゃり、と確かな音を響かせて、真珠のような艶やかな枷が嵌められた。
今だ男爵は暴れ回っているものの、増援組は枷の聖性に耐え切れず消えるか動きが緩やかになる。リーンは目の前の牙を向いたモンスターを斬りつけて、一旦下がった。

ナイフはだいぶ切れ味が悪く――――いや、ルーシェットの補助を考えてもだいぶ頑張った方なのだが、いかんせん敵の肉が腐り過ぎてよく分からない汁がその刃に染みついてしまうので、浄化しても浄化しても肉の脂はしつこく残った。

ぶんぶん刃を振って彼女の上司を見遣れば、彼は未だに前線から下がっていない。

クースは団服をリーンに貸したまま――――つまり、あらゆる魔法の加護を受けた団服（コート）が無い。＝防御力０状態だ。

他所の国の騎士が身に着けるのは鎧であるのがほとんどである事に対し、魔法大国であるこの国は他所から見ればデザイン重視、自国の視点では快適さと実用性を重視した団服（コート）を着用する。

一見布だし、リーンに至っては一撃で死にそうな団服であるが――――魔法の加護を身に纏って戦う分、当然他国よりも速さがあり、普通の鎧よりも防御力がある。

ただ、今回の二人の破れ具合は――――きちんとした聖性を身に付けていなかったので、男爵から発する呪いのような邪気で団服の効果が薄まり、二人の暴れっぷりに耐えられなかったが故だ。

今は国一番の魔女（ルーシェット）の神聖魔法の加護により、破れてもなお身を護ってくれている――――が、クースは。

今は薄ら切れる程度の怪我だが、何時ぐさりといくか分からない。

彼の兄は攻撃の手が向けられ始めたルーシェットを護る為に離れら

れない。となれば、

（走って着く頃には終わってそうな気もするけど…！）

ルーシェットから溢れる魔力を少し吸った身で、速さを上げる。陽炎のような金、いや琥珀色を足下で揺らめかせる。隙を狙って走り出す途中、彼の頭を上から狙っている触手に気付いた。

「たいちょー！」
「おま、あぶな……」
「抱きついてもいいですかー！」
「抱きついてから聞くなぁぁ！！」

べちゃ、と潰れた二人に黒い液状の物が振りかかる――――が、団服の神聖魔法のおかげで触れる前に宙に散り……それに反応した魔法が、ほんのりとリーンの身体を淡く照らした。

身体の線が消えそうな光りに包まれたリーンの下。思わず手を伸ばしたクースが、彼女の肩から零れる優しい金色の髪に触れそうになった、瞬間。

「――――さあ、お掃除の時間よ。未練もその薄汚い身体も消して差し上げる」

微笑み――――ドン、と空気が震えた。

二人が見上げる先では幾層の光りの紗が男爵の身体を貫いており、見えない所で増援組が塵と消えていく。
紗は雪のように淡く解け、抱きしめるよりも柔らかく男爵を覆う。あまりの白さに目を閉じて――――再び開けた頃には、もう何も残っていない。

…しかし、ルーシェットは何かを探すように足を踏み込んだ。
それで我に返った二人――――特にクースは気恥かしそうに伸ばした手を引っ込めると、そっけなくリーンの手を引っ張る。四人が集まった先には、ちっぽけな生き物が震えていた。

「死体に寄生する型(タイプ)だね」
「ああ。こいつに乗っ取られた奴で男爵(アレ)レベルの化け物は見た事なかったが…突然変異か？」
「…ふむ、だいぶ乗っ取られた期間が長かったのもあるでしょうけど…多分――――」
「多分？」
「……憶測だから、言わないでおく。…何だか腹が立ってきたわね」
「「なんで！？」」

ぶちゃっと腹立ちを紛らかせるように潰したルーシェットに、双子は仲良く疑問の声をあげた。
リーンはリーンで何か知る所があるのか、苦笑いだったが。

「ま、この『偉大なる大魔女・ルーシェット殿下』のおかげで無事解決ね。城周りの怪談の真実を知れたのだし――暇潰しに良かったかも」
「ああそうかい……って、リーン・ロッテ？どうし――」
「リーンちゃん！？」

先程からしゃべらずに苦笑いを浮かべていたリーンはゆっくり俯いたかと思うと、よろめいてロストへと倒れ込む。
思わず棒立ちになったクースに対し、ルーシェットはすぐに彼女の元に膝をつく。乱れた髪を直して顔色を見た。

「…魔力切れなのに魔法を使うからよ。いくら私の魔力を吸いこんで少し戻ったとしても、リーンは燃費が悪いから行使すべきじゃなかった」
「――――つまり？」
「魔力の使い過ぎからくる強制的な充填。要するに気絶」
「……なんだ、気絶か…。心臓が飛び出そうだった…」

青白いリーンの顔色に不安になるが、プロがそう判断するのだから大丈夫だろう。
ルーシェットが立ち上がってロストを促し、彼は頷いて彼女を抱き上げようと――――、

「俺の部下だ。お前は手を出すな」
「えっ」
「良い上司（ヒト）ぶってセクハラしたいだけじゃないの？」

「セク……誰がするか！！」
「だって貴方、嫌がるリーンを押し倒して無理矢理…」
「あれは事故だって言ってんだろうが――――！」
「あっクー、リーンちゃん落とさないように…わっ！」
「助けてロスト！ケダモノが私に牙を剥くの！」
「誰がケダモノだぁ……！？」
「ああもうー！二人共騒がないのッ。ルシェはからかい過ぎだし、クーは大人なんだから噛みつかない！」
「「……チッ」」

正論のロストに、二人は同時に舌打ちしてそっぽ向く。
似ているから駄目なのかなぁ、と溜息を吐いたロストは、手を伸ばしているクースの腕にリーンをゆっくりと渡した。

よろめく事なくさっさと城を目指した彼の腕の中。リーンが幼い頃父親に抱きあげられた夢を見たと言い――――それを聞いた彼が、何とも言えない気分になったとか。

★
帰りの道中←
（さあて、どう強請（ゆす）ってやろうかしら…くっくっく…！）
（――――おい、あいつすげえ…あくどい顔してるぞ）

（うん？そんな所も可愛いよね！）
（駄目だ、お前もう完全に染まってるわ）

8．友達は姫様

○月×日

今回の王位第二継承者であらせられるカトリシア殿下よりの命、無事に終えましたことを御報告します。

原因はどうやら男性の遺体に寄生したモンスターによるもので、長い間目立った騒ぎをしなかった結果気付かれず、年を経て力を増したようです。寄生型モンスター（男爵）に従っていたモンスターも皆同じく取りこまれていた模様。

後日派遣した部下の報告ですと、もうあの館にはモンスターの気配が無いとのことです。

途中、第三王位継承者ルーシェット殿下と殿下付きの近衛騎士殿の御助力を頂きました事も御報告します。

なお、その際にルーシェット殿下より今回の件の調査を依頼されました。

勝手ながら調査に関しては第四部隊が最も得意と判断し、引き継ぎましてこれ以上の報告は第四部隊隊長カスレッタ殿からお願いします。

★

――――――最後に「以上」の文字を加えると、クースはぞんざいに羽ペンを放り投げた。

「終わった……」

ふう、と疲れを吐きだすように息を吐いて、クースは冷めた紅茶を一気に呷った。

…ちなみに、積まれた書類は報告書の他にもボロボロになった団服の新調についてのものもある。
男爵事件のせいで団服が破れたリーンも、汚れて擦り切れてしまったクースも今は昔の団服を着ていた。

（昨日は第四部隊への引き継ぎと第一部隊の嫌味で一日終わったし…朝飯は逃すし…）

…決めた。団長に渡し終えたら街で遅い朝ご飯を食べよう。そうしよう――――と眉根を揉んだクースの目の前で、元気に扉から飛び出てきた部下二名。こんな礼儀も無い入室をするのはリーンと実家に戻っていたクロットだけである。

「たいちょー、おはようございます！」
「ああ、おはよう…」
「相変わらず目が死んでるねぇ…」
「うっせぇ。死ね、ハゲろ」
「そこまで毒吐かなくても…いいじゃないか…」

ハゲとか気にしてるんだよ…と今はまだ艶やかな髪をさするクロット。
彼は自分の席に着くと「団長は今日は出張、明日は陛下の執務室だよ」とのんびり告げた。

「急いで仕上げなけりゃよかった……」
「まあまあ、さっさと終わって良かったじゃないですか。それに仕立て屋さんを呼んだんですよ、報告書はクロットに任せて私達も採寸しましょう？」
「え、もう仕立て屋来たのか」

三人分の紅茶を淹れるリーンに顔を向けつつ、クースは何故か腹の立つクロットに報告書を投げつける。
その際に「痛いっ」とか「僕が！？」とか言っていたが、二人は慣れた素振りでもって無視した。

「ルシェのドレス新調のついでなんですけどね」
「あー、マーレッジさんの所か」
「ええ、アフィータさんとかだと遅くなりますし…」

――――ルシェこと、第三王位継承者であるルーシェットのドレスはだいたいが「マーレッジ・ドレスメーカー」という魔法使い専門の服を売りにしている店で作られる。

騎士が着る団服は「アフィータ魔法甲冑店」で変わり映えのないものが作られるのだが、クースやリーンのように位が高い騎士だったり、クロットのような魔法使いは「マーレッジ・ドレスメーカー」や各々の好きな店に頼んでオーダーする。（表舞台に出る第一隊に関してはほぼ全員がそうだ）

つまり位が高ければ高いほど、各人の服装は派手だったりなんだりと形が違う訳で――――そのおかげで、新人や見習い騎士達は簡単に目上の人間の区別が出来る。

礼儀作法など色々の雑事を頭に詰め込まなければならない彼らにとっては有難い事だ。

……ちなみに、「出来ましたよー」と紅茶を置くリーンの今日の服はネスチェという女性に人気の店で昔オーダーしたもの。

優しく煌めく金髪を団子にして、普段よりも凛とした風に見える――――小説に出てきそうな、颯爽とした男装の麗人といった身形だ。

結構受けが良かったとか――――――…言っていた気もするが、それもすぐにマーレッジ店のものに変えてしまったという、クースからしたら無駄遣いにしか思えない団服だった。

そんな感じで何着も団服を持つ彼女は、男所帯である第二隊でまだ認められていなかった頃から洒落たものを着ている。

一見華麗でありながら、予想に反して人懐っこくて時折悪戯っ子の顔を見せるリーンは、お嬢様育ちだというのに甘やかというよりは快活な性格から若い層に認められ、今では年嵩の騎士にも認められて、第二隊のマスコットキャラ的存在に成り上がった。

事務仕事では確かに有能で、魔法にも少し手を出している彼女は戦略上非常に都合が良い――――と、クースが戦闘時によく隣に置いていた実績や、最初に団服の華美さで印象付けたのが良かったのだろうな、と当時の彼は内心彼女の努力に感心していたものである。

――――そんなマスコットキャラの彼女。最近はいい歳だからと色っぽい服を好んでいる。

気分転換以外にも、身体的理由（胸とか）や贈られたからとか（最近着ていたのがそれだ）でちまちま買い変えているそうだ。彼女曰く、身体的理由上もう着れなくなった物の方が多いらしいが。

（確かこれしか着れる物が無いって昨日言ってたな……あれ、）

クースは思い立ったまま、紅茶に息を吹きかけるリーンに尋ねた。

「なあ、お前って今まで持ってた団服ってどう処理してんの？」

「え？売ってますけど」

「売――――え！？」

「私に憧れてくれたらしい女の子が高値で買い取ってくれたりとか、知り合いに貸してそのままあげちゃったりとか……何ですか、厭ら

しい事想像しちゃったんですかぁー？」
「うっ…うっせぇ！あ、あんな言い方されたら誰だってそうなんだろっ」
「ふーん？……あ、でも何回か男の人に売ってくれって強請られた事があります」
「は――――」

何でもなさそうに言うリーンに対し、クースは一気に顔が赤くなる。頭の中は女性の服を売ってくれと言った男が買い取った後何をするかの想像――――妄想が過り、リーンは簡単に分かる彼のそれを、にやにやと笑いながら吹き飛ばした。

「……女装したかったんですって」
「「はぁぁぁぁ！？」」
「結構可愛い顔した男の子でしてね、こっそりお姉さんの服を着て街に出たりしてたそうですけど」

お姉さんからも頼まれちゃったので、売っちゃったんです。お姉さんが友達じゃ無かったら断ってたんですけどね――――と続けるリーンの目の前で、男二人はぐったりと肩を落とした。
片方はさんざん振り回された疲れから、もう片方は事の顛末が残念だったからである。

「……でもその割には、お前の団服見ないけど」
「そのまま着る人なんていませんよぅ。大抵は詰めたり（胸を）足したり（露出多すぎたりとかして）、（自分の顔に合わせて）型を

変えたりしてますもん。よく見ないと気付きませんよ」
「それって自分で似たようなのオーダーした方が良くないか…？」
「クーってば分かってないなあ。『憧れの人』が使っていたものだからこそ欲しいんじゃないか」
「……？」
「まあ願掛けみたいなもんですね。大抵の子は仕事が上手くいかないからーとか、好きな人に振り向いて欲しいーとか。ようは自信が欲しいんです」
「リーンちゃんはほんと華々しいからね」

まあそう言われると分からなくもない。
彼女の経歴もあるだろうが、常に自分磨きに余念がない彼女だからこそ憧れてしまうのだろう。

（…つまり、第二ボタンくださいとか、そんなんだろう？……いいなあ…）

――――ちょっと羨ましくてリーンを盗み見るクースだったが、彼も彼で気付いていないだけで、彼に憧れる人間は多い。

というか彼ら双子が憧れているというか――――例えば、彼の双子の兄・ロストは若い騎士の間では「幻想の騎士」とか「王道の人」と褒め称えられている。
穏やかで才色兼備、年若くして（問題ありまくりの）愛らしい姫君をたった一人で守る姿はまさにかつて夢見たものだ。若ければ若いほど、彼に対する憧れは強い。
だが憧れはするものの、それはどちらかというと夢想に近い。確か

な形が無い彼の姿を、厳しい訓練の中で追うのは難しい所か無理だ。絶対心が折れる。

対して、双子の弟のクースは兄と違って天才ではなくて秀才である。昔は問題視されていた第二隊を、今では騎士然として部隊の中でも最も頼りにされる程のものに変えた彼の努力ぶりは、団長どころか王も目を見張った。
それに優雅ささえ感じる兄の剣とは違い、荒削りの剣ではあるものの実戦向きの彼の剣は見ていて勉強になる。
キリッとした顔立ちから厳しさを感じてしまうが、相談すれば彼なりに悩んで律義に応じるし、変な所で坊っちゃんな面が身近さを抱かせた。

中性的な顔立ちであるから、邪な想いを持っている人間も一部いるものの、彼は隊長としても騎士としても尊敬の的なのである。

普段はからかっているリーンもクロットも、そんな彼が上司である事に誇りを持っている――――…が、弄ると可愛い（もしくは面白い）からどうしてもその念が感じ難いだけなのだ。

「あー、今回はどんな隊服にしようかなぁ」
「俺、これと同じでって言うわ」
「えー……でも、そのたいちょーの団服ってアフィータ…じゃなかった、パンネッタさんの所のでしょう？――――駄目ですよそんなの。マーレッジさんがブチ切れますよ」
「そーそー。偶にはお洒落な団服作ったら？」

「めんどくさいんだよ……」

第二隊トップ3の内、2と3（つまりリーンとクロット）は洒落た風なのに対し、クースは特にこれといってこだわりがないせいか変わり映えのないものばかり着ている。

彼とて名家の出だ。幼い頃から良い物を着ていたが――――周りの人間任せだったせいか、生地の名前だの飾りだのに関心を払った事が無い。

彼としては、さっさと作れて安心素材ならどこだって構わないし、服装をあーだこーだと考える時間があったら休みたいのだ。当然欲の優先順位としては低い方だ。

それでも彼が周囲の目を引くのは――――リーン曰く「襤褸でも着こなせるむかつく御容姿」だからだろう。リーンからすると勿体なくてしょうがない。そう、勿体ないのだ。

「――――うん、今回は私が面倒を見ましょう！」
「あ、それいいね。姫様も居るんだし、おも…見てもらえば？」
「てめっ、今『オモチャになってこい』って言おうとしただろ！？」
「言ってないってー、てか君、なんで今日はそんなにカリカリしてるんだい？」
「朝飯も睡眠もとってね―からだよ！おいリーン、お前も俺の服とか別に――――」
「――――うーん、ペザントスリーブのシャツとか…団服脱いだ時絶

対可愛いだろうし…リバーレースとか……」

「……聞いてないね！」

「しかも可愛いってお前の脳内イメージの団服はどうなってんだ！？俺はそんな馬鹿みたいな格好絶対に――――おいっ！」

「楽しみにしてるね！」

「くそ、今日一日呪われてろ馬鹿！」

突っかかるクースの腕を無理矢理引きながら脳内の可愛いクースを想像するリーン。それを笑って見送るクロットに噛みつきながら、クースはずるずると執務室から連れ出された……。

★

「姫様。こちらの髪飾りは如何でしょう？」

「却下」

「ではこちらの生地は？最近流行りの――――」

「いやよ、そんな泥臭い色！私を誰だと思っているのよ」

「…あの、すいません…ではこちらの…」

「ちょっと近い。もう少し離れなさいよ無礼者。あなたの香水の匂い（姉様と一緒だから）大っ嫌いなのよ、けばけばしい…」

「……おい、姫さんが若い娘をいびってるぞ」
「うーん、さっきまでは機嫌が良かった筈なんですがね…あー、早く忘れない内に紙にでも書き写したいです」
「……内容によっては燃やされると思えよ…」

目の前では夕日色の髪の大人っぽい女性に苛々とする第三王位継承者・ルーシェット殿下が。

その周囲は布やら靴やら飾りやらが溢れていて、女性の父である装飾店の男は心配そうに二人を見つめている。

早々に帰りたいクースの隣でリーンが勝手に机を拝借してささっと羊皮紙に纏めていると、二人の傍を忙しく通る女性――――苛められている娘の母親が持って来た箱達をルーシェットの足下に広げた。

「今回は多めに持って来たのね、アンナ」
「そりゃあねぇ。お得意さんだし――――陛下が別嬪になった娘に見合うものなら何でも、なんて景気いいこと言ってくれたからね」
「……ふん」

あー！インクがー！とリーンが声を上げるのに呆れてクースがルーシェット達の会話に目を向ければ、彼女は白桃のような頬を薄ら紅に染めてそっぽ向いていた。

―――今回の仕立ては先の事件を珍しく自主的に、善意で（多分そこは親馬鹿フィルターがかかっていたと思われる）解決した愛娘へのご褒美だ。当初強請ろうとした魔導書もオマケに何冊かと一緒に買ってもらったらしい。

素直ではないというか甘え下手な彼女は頭を優しく撫でてくれる父が大好きだが、父の親馬鹿ぶりやら娘自慢を聞くと恥ずかしくなってツンとしてしまう。

「何か良い生地は見つけたかい？流行りの物も何個か持って来させたんだが」
「全部微妙ね。…ああ、でもそこの髪飾りは買うわ」
「ありがとうございます」
「アンタ、それちゃんと分けといてくれよ―――さて、じゃあアレに合うのは…これなんてどうだい？偶には肌を出すのも」
「カトリシアみたいな恰好はしたくないの、知ってるでしょう？」
「そうだったそうだった。じゃあこういうのは？シンプルだが品の良い大人っぽさが―――」

「出来た！…どうですコレ、可愛いでしょ？お人形見たいでしょう！？」
「却下だ馬鹿たれぇぇぇぇ！！こんな服着て現場に出れるかッ！」
「えー、絶対似合いますよ？フリフリなんですよ？」
「そういうのは兄貴が担当だろ…もういい、お前が言う事きかないなら不貞寝してやる。ずっと仕事しないでやんよ！」
「たいちょーは書類が溜まっていくのに耐えられない人種ですからきっとギブしますよ」
「ちくしょー！」

……と、会話文ばかりで申し訳ないが、同時に向こうとこちらで上の会話をしていた。

クースはリーンの向かいの席に座ると、頬杖をついて『却下』の文字を羊皮紙の端に印すとリーンがぶーたれたが、スルーした。羽ペンを弄びながら、ルーシェットのドレスがまだまだ終わらなそうだと欠伸を漏らしたクースにリーンが何かを言おうと口を開けた瞬間、扉の向こうから颯爽と現れた騎士が。

「ルーシェット、ごめんね、なかなか終わらなくて――――…あっ」
「…！」

揺れる黒髪は短いながらも低く縛られていて、白い団服は騎士にしては柔らかな印象を与えて。
赤い瞳も、顔立ちも似ていて、微笑みが似合う騎士の腕章は貴色である紫――――。

「兄…貴…」
「クー！おはよう、元気だった？」
「……テメー…」

あの時は非常事態だったので何も思わなかった（思う余裕が無かった）ので表面には出さなかったけれど、クースは――――この、恵まれ過ぎた兄が、自分よりも上の兄が、

「その手の中のクッキー寄こしやがれ。朝飯食ってねーんだよ」
「ちょ……あー！せっかく綺麗に盛りつけたのにー！」
「私ももーらいっ！」
「あー！！」
「そこっ五月蠅いわよ！私の分が無かったらリーン以外処刑よ！！」
「「えっ」」

大っ嫌い、だけど、兄が作る料理とお菓子は好き。……そんな複雑な仲なのだ。

★
（チョコ美味いれふっ）
（リーンだけは許すとか贔屓じゃねーか！）
（当り前でしょう、リーンは私の王子（しんゆう）様なんだから）
（クッキー…（、；ω；、））

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3578g/

僕らの日常ＳＯＳ！！

2012年1月14日15時46分発行